

〔資料〕

## 「家」研究座談会

——竹田聴洲氏をかこんで——

### 「家族制度の比較研究」会

まえがき

この座談会は同志社大学人文科学研究所の編集『共同研究日本の家』（国書刊行会 一九八一年三月）の出版にあたり、「日本の家」の概念について検討を加え、あわせて本書に執筆を予定する者の各自が考える家概念を提出して、相互に意見の交換をはかることを願ってもたれたものであります。そして意見交換には、議論を活発にするために、竹田聴洲「日本の『家』とその信仰」（『社会科学』一九七四年）を選び、そこから幾つかの論点

を提出してもらってそれをめぐって論議を重ねるという手順をとりました。ここに収録されています「問題提起Ⅰ 栗原弘」と「問題提起Ⅱ 山本正和」の報告要旨はそれにあたります。竹田聴洲氏には本研究会の主要メンバーでありましたことから御出席をねがって質問にお答えいただくことにしました。そのことから「家」研究座談会是一面、竹田聴洲氏をかこんでの座談会の性格でありました。

当時、この研究会の座談会の模様を録音テープにとり、その概略を文章化して『共同研究日本の家』に執筆

される方々にお渡しして参考にしていただく予定でありました。その予定は果たしたもののそれ以上の利用は少しも考えておりませんでした。

ところが、竹田聴洲氏は先般、御逝去されるところとなり、まことに惜しみてもあまりありません。いまそのことを思い、さきに記録した座談会の模様を再び編集し直して「資料」として残し、竹田氏の御著書の数々を理解する一助にしたいと考えるようになりました。御利用いただければまことに有難く存じます。

なお録音テープには竹田氏の発言で聴き取りできない箇所が幾つかありましたので、それらについては、編集上、削除させていただきました。お許しのほど願います。また文中に括弧（ ）を入れましたのは読む便宜のためです。

## 「家」研究座談会

日時 昭和五四年十一月一〇日

場所 同志社大学人文科学研究所 共同研究室A

出席者 竹田聴洲（佛教大学・宗教社会史）、土田英

雄（大阪教育大学・社会学）、長谷川善計（神

戸大学・社会学）、松澤員子（国立民族学博物

館・社会人類学）、高恵星（イェール大学人間

関係地域ファイル〔HRAF〕研究部長）、

松本通晴（同志社大学・社会学）、三沢邦子（

京都府立洛水高校・社会学）、仲村研（同志社

大学・日本中世史）、高久嶺之介（同志社大学

・日本近代史）、栗原弘（同志社大学大学院学

生・民俗学）、千本暁子（同志社大学大学院学

生・日本経済史）、山本正和（同志社大学人文

科学研究所研究協力者・社会学）

司会（松本）—— 本日は、ご多忙中のところ、とくに

ご連絡申し上げておいただきました。まず最初にこの座談会をもちました趣旨についてひとことお話し申し

上げたいと思います。

申しますまでもなく、「家」というものの理解に關しましては、社会諸科学のなかでは相当に多様であります。そうですのでこの際、共通の理解ということまではとてもできないとは思いますが、少しなりとも整理できますれば、というように思うわけありますし、もしたとえ、それでなくても、だいたい他の方々がどのように考えておられるのかという点につきまして、多少なりともお教え頂きましたならば、全体の構成上より整理されるのではないかと存じまして、それでお集まり頂いたものであります。

それから、各論文が完成しましたあと、できますればもう一度お集まり頂き、論文を執筆したあとに、どういふ問題が残るのか、あるいはどういふかたちで将来の展望がなされるのか、という残された問題とそれへの接近等々の問題につきまして、お話をいただき、最後の「総括」のところに載せられれば、というように考えて

おります。

そういうわけで、まだ現在のところ原稿がとても進んでいない段階だと思うのですが、今日は、どうか気楽なかたちでお話し願えば良いのではないかと考えている次第です。

そこで、話の手順としまして、どのように問題を進めたらよいのかと少し考えたのですが、ご案内にさしあげましたように、以前に竹田聴洲先生の「日本の『家』とその信仰」（『社会科学』）という第九回国際人類学民族学会議で発表されましたペーパーがありますので、それをきっかけにいたしまして、お話し合いを願いたいと考えております。一人は、民俗学の栗原さんから、もう一人は社会学の山本さんから、いろいろな形の問題をだしていただき、それをめぐって論議を進めてまいりたいと思います。

問題提起 I

竹田 聰洲

「日本の『家』とその信仰」について

栗 原 弘

この報告書には、日本の「家」の宗教的側面の研究に長年にわたって携わって来た氏の見解が簡潔にまとめられている。以下その見解を要約し、討論の一助としよう。

「家」の本質とは、先祖以来その後継者たる代々の家長によって継承されてきた直系系譜関係である。「家」は日本独自の社会制度であり、欧米の近代家族のような夫婦一代限りのものではなく、各世代の血縁家族を縦に貫く一つの「家」という契機に包まれて一つの家族として日常生活を共同にした。この世代を超えて存在する「家」という制度はこれに属する家族とは別個の存在である。「家」とは直系・傍系にわたる複数の単婚家族を

含むから、かれらを自他に対して代表する家長を必要とし、その家長に代表される「家」の存続は世代を逐って直系の・男系的血統相続が原則である。従って「家」の内部で血縁・血統は重んぜられた。しかし「家」と血統とは別物であり、「家」とは血縁と言う生物学的契機よりも更に優越しており、世代を超えて存続するものであり、その本質は系譜と見るべきである。

「家」は強い永続性を持ち、累代の家族の生活は万般にわたり自らの担う「家」の永続性の線に沿って展開された。その永続性は「家」がその創設当初から持つ要請であり規範であって、結果としての事実ではない。「家」永続の要請規範は「家」をその創設以来現在まで持ち伝えた先祖に対する至上の崇敬（祖先崇拜）と表裏一体となっている。「家」永続の規範はこの先祖の祭りを絶やさないことの中に集中的に表われる。この意味において、「家」は必然的に一定の宗教性を内在させる。先祖はその生存時の名称や個性の記憶は不可欠の要件ではな

く、また生存時の社会的地位は問題ではない。「家」の累代の幸福を看護してくれるものとしての崇信の対象たりうるものが、先祖の必要かつ充分な属性であったため、既知の神仏によって容易に代位されたが、先祖の崇信そのものは特定の神仏の信仰によってもたらされたのではない。先祖は理論的には「家」の系譜の始源であり、また彼らは常に故人であり、その靈魂としての存在であるが、一般日本人の家の先祖は死せる故人として誰彼ではなく、創設以来今日まで家を維持してきた歴代家族の靈魂が、徐々に個性を失って一つに融合した全一体と考えられた。家族の靈魂は死後一定期間はその個別性を保っているが、次第に聖化して個性と死穢を脱却し、家の先祖という全一体的靈体へと合成される。その意味で先祖は個別概念ではなく、包括概念であり、累代家族の精神的幸福に対する最大の保証原理として、系譜の根源に存在することが要請された。

日本人の生活文化は基本的に稲作に依存してきたが、

また日本の社会は基本的に「家」を構成単位としたから、その稲作も「家」を単位として経営された。従って「家」の祖先は稲作の守護神と一体化した。祖先信仰は日本人の信仰一般の中枢を形成してきたから、仏教のような外来文化も、これと化合することなしには日本の風土に定着しえなかった。「家」には様々の異質な神々が、様々な形で複合しながら全般として、その存在形態は極めて複雑に錯綜している。中でも、仏壇と神棚は、神（固有信仰）と仏（外来宗教）という視点から両者は全く異質なものとして見られやすい。しかし仏壇とは先祖棚の変質したものであり、仏像なしにも存在し、それは先祖の祭壇としての意味と機能をもつ。又、神棚は家毎に常設であることが特徴となっている。しかし家毎にあるのは本来的でなく、同族神・本家屋敷神を前身としたものであり、さらに常設というのも本来の姿ではなく、季節的に去来する神の送迎のために臨時に棚を設けて祭ったのがやがて常設化したものである。従って、神

棚の成立は、これと併存する仏壇の成立と密接な関係があった。即ち両者は何らかの意味で家の生活を看護する点で軌を一にし、両者とも同族神であるということにおいて、根源的には先祖でなければならず、そこでは神も仏もともに先祖の化身という点で絶対的区別はない。つまり、日本の民俗文化は古来基本的に稲作文化に依存し、「家」の幸福は稲の豊饒によって最も良く象徴され、稲の豊饒は神の恩寵によって与えられると信じられてきたから、先祖は子孫の生活の安寧と幸福を常に看護するものとして、しばしば農神あるいは穀霊の姿で考えられたのである。

以上の竹田説は祖先信仰の性格全般については基本的には柳田の理論に依拠しており、柳田以降の多数の民俗学を中心とした諸研究を吸収し、京都府下で実施した村落の同族団や墓制の実態調査にもとづいて、柳田の理論の整理と伸展をなしたものである。

## 問題提起 II

### 竹田聴洲氏の「家」理解について

山 本 正 和

竹田聴洲氏の「家」理解については、今日まで何人かの論者によって論ぜられているが、ここでは「家」の現実的な存続形態の視角から、私の理解しえた限りで、整理されていないままの感想を述べておくことにしたい。

竹田氏の「家」把握の特徴はそれを祖先祭祀との関連で捉えたことであるが、それをまた村落社会の同族団との関連で検証するなど、地域社会論への視角を含んでいる点において、先行の柳田国男をより発展させている。

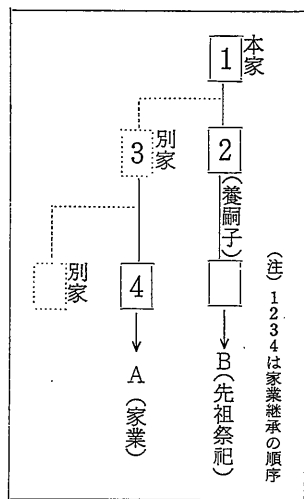
その「家」の論理は氏の初著『祖先崇拜』（昭和三二年）に明瞭に述べられている。それにより、概括的に見ておけば、まず「家」は世代の存続、家長の地位、系譜性等を基本的な構成要件とする社会制度であるが、中でも特に系譜性こそがその中心的な本質である。では、なぜ系譜性が意味をもつかと言えば、「家」には始源が存在

すること、そしてそれこそが「家」に存在の根拠を与えているからであるとする。その始源が祖先であって、「家」とはそうした祖先の崇拜の「座」として意味をなすのである。したがって、「家」が存在し存続するためには祖先は存在せねばならないもの、つまり実体概念ではなく一つの要請概念として捉えられている。そうした規範的な意味をもつ祖先崇拜という倫理体现の場が「家」であるからこそ、それは「単なる事実ではなく社会的当為である」ということになり、始源（祖先）への崇拜行為の連続が、「家」を自生的に存続させて行く根拠と考えられたのである。このようにきわめて原理的につきつめた把握が竹田氏の「家」論の特徴であろう。

しかし、「家」を現実的な社会制度体と理解するならば、そこではその存続のためには祖先崇拜以外の要素が考慮されねばならないのではないだろうか。つまり、祖先祭祀は「家」の一条件ではあっても、「家」はそれだけで構成されてはいないように思えるのである。竹田氏

の認識順序は、その点で、祖先崇拜の究明がまずあって、ついでその実現形態として「家」が考えられているようであり、たしかに祖先崇拜と論理的には関連するけれども、「家」自体が社会的な場で現実存続し機能している場合には他のより多様な要件を考える必要があるのではないだろうか。「家」は竹田氏によれば一種の祖先祭祀体系であるが、しかし同時に、これは熟さない言葉ではあるが、いわば一つの生活体系としても考える必要がないだろうか。そうした観点からは、「家」の構成要件としては祖先崇拜と同様に家業、家産等が重視されねばならないだろう。それは、「家」において、祖先が発生・原理的な存在根拠であるとするならば、家業はいわば現実的な存続条件であると考ええるからである。

それを左図に示したある工家の系譜の事例で見ておきたい。これは、工家の養嗣子が家職を継承しないために、工家の系譜の表徴である雅号を非血縁の徒弟分家（別家）が継承して家業を継続している例である。B系統



の所持をなしてはいる。しかし、祖先祭祀権は保持しても家業をとり上げられた方にとっては、祭祀体としての「家」となる根拠をもってはいても、現実的に社会的機能をもった実質的な「家」を構成し現象しえないのである。他方、A系統の家は、主家の家職を継承することにおいて、みずからのみならず他家からも系譜性を認められ、より重要なことは、その家からまた新たな「家」(別家)を分枝しているのである。つまり、この例のように、「家」の系譜とは祭祀の系統をたどるだけでなく、家業の系統をたどって継承される場合があるのではないだろうか。ただし、こうした事例は今日の都市の商

の養嗣子は確かに祖先祭祀の継承者として、法事の行事、位牌の養嗣子は確かに祖先祭祀の継承者として、工家においては決して少ないケースでないであろう。これは「家」の変容過程にあらわれる一局面とも見られようが現実の「家」はこうした多様な条件に媒介され、その変化の中で存在しているのではないだろうかと考えられるのである。

ついで「家」を、こうした自生的根拠だけでなく、存続して行くための媒介条件から見ると、戦後的な条件の発生の中で、「家」を成り立たせる条件もまた変化していると考えられないだろうか。たとえば、竹田氏によると、「家」の本質が系譜性であれば、それは基本的には嫡系と庶系とが分離することで存在意味があることになるが、その場合、今日的には家族構成の変化や出生児数の減少という社会的条件においては、それによる「家」の変容は余儀なくされるのではないだろうか。そのように考えるならば、竹田氏の祖先崇拜に根拠づけられる原理的な「家」把握にあつては、前述の事例も含めて、「家」がより大きな社会的連関に組込まれ、その条件に対応しつつ、たとえば祖先祭祀行事をも形骸化しながら



ら、変容しているという側面はどのように考えるべきかと思われたのである。

以上、竹田聰洲氏の「家」の考え方について、その基本的視角にたいして多大なる意義と畏敬を感じつつ、みずからの理解不足をもちえり見ず、未熟なままいくつかの質問として述べさせていただきコメントに代える次第である。

司会—どうもありがとうございました。栗原さんの場合は、異なる学問体系からする「家」の特徴づけのちがいを考慮しながら、竹田論文を読む必要があるう、ということでありました。一方、山本さんの場合は、竹田先生の「家」という考え方と、それが存続していく条件、ならびに、「家」が現実的に存続していく内容が指摘されていたというように思われます。

それでは、それについて、竹田先生の方から直接お話を返していただくことからはじめましょう。

竹田—ぼくは今日は「被告」の立場ですからね（笑）。

最後まで「弁論」の機会が与えられずになるんじゃないかと思ってるんです。（笑）だから最後に……（話したいと思いますが）。

司会—もし、お話を最後にしたいと思われるなら、こちらから少しメモを出したいと思いますが。

竹田—「裁判長」におまかせします（笑）。

司会—では、竹田先生、最初に少しお話をお願いします  
竹田—それでは、ちょっとさきほどのコメントのリコメントとでも言いますか……。さっき、栗原君が紹介していたいたわけですけど、この問題（「家」）をとりあげるに至ったプロセスといえますか動機といえますか、それをちょっと簡単に、御参考になるかもわかりませんから、述べてみたいと思います。

柳田さんについてですが、これは実際は昭和一九年ぐらいから執筆していたのですが、本になって出たのは昭和二十一年の筑摩書房の『先祖の話』という本があります。それが戦後にひじょうにウェイトをもって書かれたわけ

ですけれど、しかしそれからすでに四半世紀以上たった今日では、あながちその考えだけでは（通用しないといって）柳田国男自身の考え方といえますか民俗学の考えに（対して）、民俗学は一面ではブームだと言われているけれども、また同時に、批判がたくさん起ってきているようです。それはムードで批判しているふうもあるようですし概括的なテーマで批判……（しているものもあるようです）。

柳田がですね、「先祖」の話をとりあげたのは、柳田国男という人の約五〇年以上にわたるキャリアの一つの到達点といえますか、（もちろん）それ一つだけではありませんが、それを示したものであると思います。自分（柳田）もそう思い、人からもそう思われていたと考えられていたわけなんです。しかし、最近では、柳田の学問は、とくに今ここで問題になっていることに帰結していったようなことについては、民俗学の父だとか何だとかいいうけれども、要するに一種の神学（ハロロジー）であると、そして、柳田学は「祖先」というものを指導概念としている

柳田神学だとか、あるいは祖霊神学であるというふうな批判が、民俗学の外部からではなく、内部からも出されているようです。（その内容については）今、栗原君が要領よくまとめて紹介してくれたわけですが。私はちょうどその頃（柳田の『先祖の話』刊行当時）、丹波のいなかの山奥の寺に住んでいまして、そういう山村の村落の寺院の中に住んでいたという与えられた条件がありました。それはわたし個人のことですが、ちょうどその頃に柳田国男の本が出たわけです。

それから、さきほどのコメントにもありました有賀先生の有名な著書（『日本家族制度と小作制度』一九四〇年）があります。それは戦前に出たのですが、私は日本史の出身でして、有賀先生は社会学であり、（だから）私は全く門外漢であつたのですが、この有賀先生のご郷里の信州、それはまあいけば基本的なフィールドになっている、（もちろん）それだけじゃなく全国にわたつてはおりますけれど、これも私はのちほど、（読んで）たしかに信州の農業の経営形態とか村落の構造とか、いろいろ

違うところもありますけれども、しかし、門外漢なりにひじょうに教えられるところがありました。

柳田さんの文章というのは、ご存知のように非常に晦渋というか、そんな所があったわけですね。それで、そんなところ（丹波の村落に）に住むことになったという（自分の）与えられた条件と、研究生活の発露するところに柳田さんの本を読んだことが、じっさいは少し前になります、重なったのです。そこで私は、結局のところ、柳田さんの本と有賀先生との間に自分なりにブリッジをかける必要があるんじゃないかと考えたのです。

それから、まことに貧しい自分の周辺で見聞する事を素材にして、それで、機会を与えられたものですから、さっきのコメントでおっしゃった（私の著書ですが）、テーマは当時ここ（同志社大学）におられました三品彰英先生、その人は私の先生ですが、（先生からすでに）学生時代にテーマを与えられていまして、その当時として自分のできる限り考えようとしたわけですが、考えようとするその方法が、今言ったようにこの二人の偉大

な学者の主著の間にブリッジをかける、そして、それで自分なりの理解を、という（ことで）、まあとにかく活字に（して）、昭和三年に生まれて初めて本（『祖先崇拜』一九五七年、平楽寺書店）というもんを書いたわけです。

そこで、私が最初から最後まで危惧をいだいていたのは、自分が社会学とか民俗学の門外漢であるということでした。柳田さんには、学生時代に集中講義をうかがったことがありますけれども、有賀さんに至っては全くの本だけでしか（知らない）。門外漢であったので、それぞれそれぞれのオリジネーターを誤解しているところがあるのではないかと、あるいは間違っているところがあるだろうというところ、はきちがえているところがあるだろうというところ、それが私のいちばんの危惧であったのです。それで、その本を柳田さん、有賀さんにも、これは間違っているではありませんか、という手紙をつけて献上しました。したら、柳田国男は、それについては、まあなんでしょう、おそらく若僧の門外漢の本をまともにとりあげるには足らんという気があったのでしょうけれど

も、おもてだつてどこが間違っているかという、そういう批判めいたことは筆でも口でもあんまり言われませんでした。しかし、柳田氏は(のちに)、おまえの本は、他かの者にも読ませたいから一〇冊ほど送れ、と先生が言うてきたのですわ。それで、応答はそれだけだったので自分がはきちがえていたら(おそろく)こんなことは言われないのではないかと思って、なにしろ初めて書いた本ですから、なけなしの金をはたいて一〇冊の本を、もう代金はけっこうです差し上げます、と言って送ったのです。そしたら、えらいおこられました。そういうことを言うもんじゃない、と、(言われ)こつぴどく手紙で叱られました。その手紙は『定本柳田国男集』のなかの『書簡集』(『別巻、第四』六九二頁)に載っております。

(一方)有賀先生は、その後まもなく逗子のお宅をおたづねしたら、とにかく要するに、まちがっているとも正しいともおっしゃらずに、なんかえらい逗子の海でとれたご馳走をよばれたことだけを憶えています。その

後、有賀先生とは、昵懇というほどではありませんけれども、抜刷など頂だくようになりました。それが最初のころのことです。

それから(後は)、約二〇数年来この同志社大学のそれも人文科学研究所の何回かのプロジェクトチームに入っていただいて、直接「家」というよりは、丹波地方にみられる同族団の同族祭祀に関するいくつかのモノグラフをつくる機会がありましたので、学生諸君とともにいろいろとやってきました。そこで、一昨年(勤務している)大学を移るにあたって、それを自分としては記念のために、まとめて『村落同族祭祀の研究』(吉川弘文館、一九七七年)をだしました。これはモノグラフを集めたものです。

そうしましたら、今年になって、東京工業大学の人類学者の岩田慶治さんが『季刊人類学』でその本を書評して、そこで、書店が『村落・同族・祭祀の研究』と印刷しております、どうしてそうなるのかと思ひまして、そ

れで編集部に問いあわせてそれがミスとわかったのです  
が……。その中で岩田氏は、(私の)本を(評して)、飛  
んでる鳥が空から眺めるような鳥瞰図というのがあるの  
ですが、これは回虫が腹の中から体を眺めているよう  
な、(いわば)虫瞰図のようなアングルというか視角の  
ようなものである、と書いていました。そして、それが  
良いとも悪いとも述べられてはいないのです。ですが確  
かに言われる通りです。その中では、柳田の理論とい  
うか方法というか、それについて、結局は、民俗学は科学  
としてポーズはとってはいるけれども、(やはり一種の)  
神学であると、そして、それぞれ関係ないようなことを  
言っているが結局はそこへ話が行ってしまうのだ、と  
言っていました。そういう神学の指導理念みたいなもの  
についてはいろいろと批判があるようです。

(ところで)ではおまえはどうなんだときかれそうです  
が、それについて私は、柳田の研究というのは、これは  
決してできあがった結論をだしてそれをみんなに押しつ

けるというのではなくてですね、端的に言うなら一つの  
作業仮説といえますか、いろんなデータを、(つまり)  
日本人の間に過去、現在、未来にも行なわれている一見  
関係もないような、山のようにたくさんある断片的な材  
料を統一的に解釈する(ための)いわば理論を与えるた  
めに、このように考えたら一番良いのじゃないかとい  
う作業仮説、(もちろん)柳田氏ははっきりそうはいいま  
せなければ、そういうふうには、(もちろん)例の言い方  
ですが、言っているように私は思います。ですから作業仮  
説ですから、将来、改められることも最初から期待して  
いると思います。今までの研究段階で、視野にあがって  
くることを最も統一的に最も包括的に解釈するために  
は、こう解釈するのが一番妥当ではないかというところ  
だろうと、私はそう思っています。ですから、細かい問  
題についていろんな批判は、神学だとか……多々あるの  
ですけれども、僕はべつに何も柳田氏を弁護する必要は  
ありませんけれども、しかし細かい問題については、こ

の点は柳田氏はこう言っているけれどもおかしいじゃないか、というような点は、いくらもあるわけです。また彼が死んで一〇数年たってから、その間に日本の社会の変動は大変なものですから、それをそうなる前に知らずに死んでしまったわけですから……。

しかし、公平にみたところですね、それに対決するような理論体系というか、すべての問題を柳田ほどに広くとりあげて、それに対する理論的な分析というか、解釈といいますが、柳田とまったく違った体系をたてたという、そういうものはどうも今までのところないようになっていますね。個々の点についてはいろいろあるでしょうが、現在のところは、そういう意味で割引されるのではないですが、柳田理論はそういう点では、まだ存在理由（*レジヤン*）が許されているのではないかと思えます。ですから（柳田学というのは）何が何でもこうだという戦争中のイデオロギーのように、これにあわなければ国賊だというようななかたちではない……。

その後、私はいなかから出てきて、やっぱり寺の中ですけど、京都の町に住むようになって一七、一八年たちました。最初こちらへ来ます時は、おそらく、われわれがこのプロジェクトチームでやってきたような、（それは）村落のことばかりだったのですが、村落には古いものが残っているけれどもとくに高度経済成長の非常にスピーディな都市化（*アーバンイゼーション*）のなかで、村落では残っているものでも都会へ行けば影もかたちもないだろうと予想し、そう思っていたのですが、さきほどのコメントの中にもありました、たしかに一見はそう見えるのです。たしかに村落と都会ではあらわれ方は非常にちがうのです。しかし、さっきの岩田氏の言を借れば鳥瞰図ではなく、翼をとめて地面におりて中からよく見れば、簡単にそうは言えないのじゃないかと思いました。つまり、はっきり言えば都市は都市なりのかたちで、依然としてそういう共通分母みたいなものは、現在のところ完全にはなくなってしまうとはいえないように思いますね。そ

こで一番問題になるのは、表面から見て目に見えなくなったということが、はたしてそれが絶滅してしまったものなのか、あるいは内部に潜在化してしまったために目に見えないでいるのか、ということだと思っています。たしかに、潜在していても表面からは目に見えないということとは同じことなんですけれども、（絶滅か潜在か）そのどちらかだろうかということだろうと思います。私はそこで今のところ何となく、後者の方とちがうか……という感じをもっています。何が何でもそうだと決して申しませんが……。細かい事例はいちいちこの場ではあげませんが、そういうふうに考えるのです。

——竹田先生のお考えの背景をお話しいただいたので大いに、われわれには助けになりました。

ここで他の人の意見が出ませんので、話題提供として、竹田論文（前掲）を読んでの疑問点を少し述べてみます。一つは、当該論文中に、「家」と「家」として二通りの表記があり、引用符号がちがいますが、何か意図

があつてのことでしょうか。二番目は、文中に「家や祖先祭祀は西欧近代国家におよそ存在しなく……」となっておりませんが、それでは近代以前にはあったということでしょうか。あるいはそれと日本との関連はどうなのでしょう。ついで三番目の点は、「家は潜在的に存在する」と言われるが、その根拠は何であつて、またどのような意味なのでしょう。それから四番目は、「家」は他の社会科学でも研究対象としておりまして、その場合には「家」の要件として家業とか家産といった特徴があげられています。ここで「家」を祖先崇拜に集中していくのは、どのような根拠からなのでしょう。最後に、祖先崇拜は日本独自であり他民族には見られないと言われますが、その点をもう少し詳しく説明してほしいと思います。

竹田——お答えになるかどうかわかりませんが……。一番最初のコーテーション・マークのことですが、私もいま言われてみて（初めて）そうやなと思いました。

言いわけやないですが、(この論文は)活字にしようとは思っていませんでした。昭和四八年に国際人類学民族学会議がシカゴで行なわれて、(これは)その時に提出した英文のペーパーで英訳するための日本語の文章として出したので、本来発表するものところがうのですが、それをアメリカ人の人類学者でちょうど日本に来ていた人に翻訳してもらったのですが、その時に読みちがいされたり、スカタンの訳つけられたら具合悪いな、というのでいろんなしをつけたのですわ。(その時に)コーション・マークさえついていれば何でもええと思っていたのですが……(笑)。

次に、ヨーロッパの近代以前に「家」があったのかというのですが、そら、ないと思いますが、この辺のことは私にはさっぱりわかりません。ただ、はっきり例を言いますと、例のクーランジュの『古代都市』、これはあちこちにいやというほど出て(引用されて)きますが、それに、穂積陳重氏の『祖先崇拜と日本法律』ですか、

あれも英訳される論文もとの版らしいですが、あれも明治三〇年代の知識ですが、いろいろと書かれているようです。それから後は事典的知識で(して)、エンサイクロペディアを見れば、たいがいそういう意味のことを書いてあるのでそのまま何したわけです。(だが)この辺のことは、ご専門の方がおられたらお教え願いたいところです……。

次は、潜在的に存続するというのは一体何かということなんですが、ここはいろいろ議論の分かれるところですが、(つまり)絶滅したのか潜在的に存在しているのかという、どっちも目に見えないということでは同じですが、結局、どういいますようかね、イデオロギーと言ったらちょっと具合悪いでしょうが、けれどもまあ、見方の相違といえますか、そういうことではなからうかと思えます。これは具体的な例を挙げよと言うことですが、戦後、川島武宜の『日本社会の家族的構成』(一九四八年)という本とか、それから私の最初の本(『祖先崇



「[ ]」に（たくさん）引用していますが、階層を問わず、時代を問わず、都鄙を問わずなんか共通分母といえますか、公約数的なものとして存在しているように見えるという（もので）、たとえば近代社会では安岡さんの財閥（安岡重明『財閥形成史の研究』一九七〇年）もそうですが、独占資本がなぜ日本では財閥という顕著なかたちにあらわれてくるのかということか、それから、近代的な資本主義社会の職場なんかの人間関係の中でも、親方子方、親分子分ということがある。（また）自由民主党の中にも派閥というものがでてくるのは結局は親分子分のあらわれとちがうか、と思います。なぜ、ああいうものがでて来るのか。それはセクトには違いありませんが、そのニュアンスと派閥とはちよつと違うように思います。それからずっと後では、中根千枝氏の「タテ社会論」（『タテ社会の人間関係』一九六七年）も結局は、「家族的構成」と言うのといろいろ違うところもあるでしょうが、基本的には触れ合うのとちがうか、ということでは

す。それは一見、いかにも開明化されたモダンなニュー・モードのように見えるけれども、皮をめくってみたら、同じものがそこには消えてはなくなるといいますか、消えたようでも、ある限界状況になってくると前とは別のかたちやけれども、そういうようなダイナミックがある以上、（これは）潜在としか言いようがないのとちがうか、とそういうつもりで考えています。

それから、「家」の本質としての系譜のことですが、それが祖先に集約されるのはどうということかということなんです、これについては喜多野清一さんも有賀喜左衛門さんも社会学の立場から、フィールド・サーベイというか、モノグラフに拠って日本の「家」は、ということかたちで社会的に分析して結論コンクルージョンされて来ようとするわけですが、しかし、私の立場から言いますとですね、（そこから）沢山のデータは教えていたのですが、とにかくみんなすべて、「家」が存在しているのだという前提でやっているというか、こういう事実があるから「家」

はあるのだという論理とか口吻で語って……（いるように思えます）。「家」のあり方は時代、地域によってさまざまに違うけれど、とにかく「家」はあるのだと、そこから小作制度は同族的なあらわれをするとか暖簾内もそういうかたちであらわれてくるということを言っている。ところが、社会学者の先生方が、すでに既存の事実としてそこから出発される、その「家」というものがどうして日本の社会にはそれほど普遍的にあるのでしょうか、ということ、なぜそういうかたちになっているのでしょうかということが疑問とならざるを得ないので。そうすると、結局、「家」というものは、もうひとつ奥というか、次元がちがうところにあって、それが社会的にはあらゆる場合に現われてくると見るべきではないか、それは何かということになる。（つまり）そうしますと「家」が原因ではなくて、「家」を結果するもうひとつの奥の原因は何だということになるわけです。それは同じ次元でやっていたれば堂々めぐりに、（つ

まり）それは「家」の原理があるからだといえば、それではその原理はどこから来ますねんというようになる。大体、説明の原理というものは求めていったら際限のないことであって、宗教的な原理というのは与えられるものですから、だから、なぜ日本人がそのような宗教的原理をもっているのかということは、これは語るにおちるということになるわけです。だから、まあその辺で行ったこうということで、こういう考えをたてたら他のそれ以後のことも解釈できるのところがうかと思えます。それであ、祖先というのは（その場合の）ひとつの集約原理ではないかと思っていますから、（もし）それに代りうる原理があればお教えいただきたいと思います。同時にそれと祖先との関係がどうなるということも教えて指導していただきたいと思っています。

それから、東亜の仏教圏ではどうかということですが、このところはポイントの置き方（の違い）なのです。ただ、祖先崇拜が（東亜の仏教圏に）全くないとは言

えないのですが、ただ日本のような祖先崇拜は他民族には見られないと思います。「日本のような」という点に重点をおきたいし。傍点でもうつとけばよかったんじゃないかと思っています。こういう方面の研究はここ数年間は東南アジアへフィールド・サーベイに行く人もあるようですが、以前はほとんどないように思います。中でも一番、手短かに手取り早く考えられるのは中国と、それに朝鮮ですわ。それは日本の仏教は中国から来たものですから……中国にはそういう例があるわけですが、しかし日本人は文字や形で表現するものは中国からとっていますけれども、しかし、祖先崇拜は中国では、ある時期には仏教と密接な関係があったけれども、ある時期には消滅してしまったと言えると思います。日本のように、今日に至るまで連続してずっと続いていることはなかった。そういう意味では、日本のようなかたちというのは日本だけのことだと思えます。ただ中国でも、随や唐の時代のある時期だけは存在するというのはあります

が、しかし日本のようにそれにたいして連続するのではなく……いれ代りたち代り王朝が代って行くので……そうやってけえへんのはあたりまえと言え（そうなんです）……そういう事実があったところで祖先崇拜がとにかく現在にはなくなってしまっていることは間違いないわけで、そうしたかたちは日本だけのことと思います。まあ、それ以上のことは考えていないのです。それで答えになったかどうか……。

——もう一度質問しますが、一つは祖先崇拜が、それが潜在であれ絶滅であれ、日本の全体社会や文化構造とどのように関連するのでしょうか。二番目は、それでは「潜在する」ということは、永続するのでしょうか、あるいは消滅というカテゴリーは出てこないのでしょうか。たしか竹田先生の論文でも、「都市近郊の団地は別にして……」という表現がありました、そういう社会層では、もはや祖先崇拜は消滅しているというように考えられないでしょうか。

竹田―まあ私はどうも簡単にはそうはならないと思います。私も初めはそうかいなと思っていたのですけれども、そうとも言えんのちがうかという考えに傾いてきつつあるというのが正直なところですよ。といいますのは、(都市)近郊の団地とかたちは日本の近代では初めての経験ですから、ああいう様式というのは、実のところまだ良くわからないのです。ですけれど、世代が二世代、三世代に重なれば、まだそういうのは現われてないですけれど、はたしてそう簡単に言えるかどうか、(そうは)言えないのちがうかという感じがします。それがいけばん象徴的に現われているのが墓やと思うんですわ、(私は)寺におるから関心があるのかも知れませんが)、戦後の住宅事情で(そこには)核家族が住んでいるのですが、核家族、単婚家族というのは、精密な統計は知りませんが、大体において二男、三男という人が多い。だから、自分の本貫の地、本籍地はいなかにあ

る。それだから盆の十三日や十四日になると東京駅や大阪駅の前に天幕を張って、……何するということになっている。それは、結局、家族が郷里に……つながっているから、そうするのであると思います。そうしますと、その家族だけをとってみれば二、三男ということ……で、(そのような核家族は)今は「愛の巣」ということです。が、子供がやがて中学や大学へ行って、嫁さんでももらうようになって、世代が重なってきたときには、どうなっていくやろうと、これはまだ日本では一般的に現われていることやないですか、これは私の素人の感じですが、そういうふうに思います。ああいうマンションとか何とかメゾン等の居住様式は、学校出たての若い世代がふつうあそこから出発するのが人生の一般的になっているけれど、永久とわのすみかとは考えていない、できた一軒建ちの家に住みたいと志向をもっているというところが新聞報道なんかで言われているのですが、確かにマンションは合理化されているが、永久の住居とは考えて

いないようですし、またある年令層になれば考えたくないようです。』(もちろん)それは単に家族がふえてきて空間が狭くなってきたら、与えられたマンションの何DKでは(狭い)、だから、広い独立家屋(が必要)だという説明がされますけれども、世代が重なってくると、そういうこと(祖先崇拜)になって行くのと違うか、という感じがしますんですね。それが非常な限界状況にあらわれるのが、都会の墓やと思います。……まあそういうところだと思います。

——「家」の本質が系譜である、ということと、「家」の性格は祖先崇拜の原因と結果である、ということですが、たしか有賀喜左衛門さんの本では「家」の存続が系譜であるというように把握されていたように思います。その両者(系譜と祖先崇拜)は相互にどのようにに関連しているのでしょうか。

竹田——有賀先生や喜多野(清一)先生、もちろん細かい所はいろいろがっているというのが社会学専門の話

ですが、私なんかはようわからん話ですが、二人とも系譜ということを非常に重視されている。私が系譜というのは、その二人の社会学の先生から本を通じて教えられたということもありますが、このプロジェクトチームには永年ずっと一緒にやっていたに感ずる事から感じましたことは、明治民法の家族法のところに、「絶家再興」ということがあるのです。法律のことは私はまっくの素人ですから自己流の解釈ですが、とくに、丹波の山国のフィールドで、私はそれを見たと思いました。さっきのように家族が全部死滅してしまっている、それは山国の山村特有の例でしょうけれども、だけど持山の株を「家」が持っているという、そしてその小島家という家が絶家した家の株を持っている、そしてブランクの時期があってもずっと後になってから、分家としてとりたてる場合に、その株を分かち与える、そして系譜の縁故がつかっていくという例を山国なんかでは見たわけですから、どうしても、どうしてもそんな事をおこってくるのでし

ようか。つまり、家族が絶滅してしまえばそれで「家」は完全に消滅してしまうのであって、後日になって家族が結成されても、それは新しい「家」がつくられたということであって、絶家が再興されるというのは、なんか潜在的にあったものが表面に出てくることとして捉えなければ、絶家したらチョンになるものが再興されるというのはどういうことか、そのことも「家」の潜在化ということに大きな根拠というか支え柱になっていたと思いませんか。おそらく他の民族の社会ではそういう事はないのではないかと思えます。(他民族については) 感じだけですけど……。

——系譜、祖先崇拜を特徴とする「家」は、家族とは異なっていた一つの社会制度であると捉えるのが竹田先生の前提になっていますが、しかし、ここで「家」と区別されている家族もまた社会制度ではないでしょうか。つまり「家」と家族とは全く別のものであると言われるが、家族を親族関係だと理解すれば、チチ(父)、ハハ(母)、オジ、オバ等という親族的地位にもとづく権利義務を規

定しているのは、家族もまた親族関係にとつての制度であって、「家」という枠の中には、親族関係の制度化がなされていると考えるべきではないでしょうか。

また系譜は超世代的であると言われますが、そうならそこには時間概念が入りますから、その場合は相続か世襲かという問題を考えるべきだと思います。すなわち相続の制度がどうかであるのか、また世襲の制度がどうかというように考えて、そのような親族関係の制度がどういう社会制度のもとで出て来るのかというように考えないと、問題の背景が明らかにならないのではないのでしょうか。

結局、「家」を社会制度だと言って家族と区別することと問題があるのではないのでしょうか。家族もまた社会制度であって、社会制度でない家族とは一体何を意味するのでしょうか。クーランジェ(『古代都市』)でも、それは古代家族の社会制度を捉えているのではないのでしょうか。そう考えれば、「家」と家族とを画然と分ける

のではなく、家族のもつひとつのケースとして理解するほうが無理なく自然ではないでしょうか。

竹田―今、おっしゃた世襲と相続が時間概念とよりあわさってどういう関係があるのかとのことですが、これは私から質問したいのですが、相続のことですが、(そこでは)何が相続されるのかということです。相続の対象とか相続物件とか言いますけど、そうしますと日本の明治民法ではふつう相続と言えば、現在の民法が考えているように財産相続だけが相続であるのに、日本の場合には、それとは別に、それにさらに優先したような地位で「家督相続」というようなものがおかれているという、そしてまあ家督相続というのは戸主の地位だとか権利義務、墳墓だとか系譜だとか祭具だとか……の家督相続がおかれている。そういう相続法のかたちがおかれているのは日本独自かどうか知りませんが、非常に日本の特色になっている思っている……のですが、その点はいかならうでしょうか。

――中田薫氏の解釈によれば、家督とは家産の管理権であると述べられています、ある時期にあつては確かに家督は物財と一体になっていたと思います。しかし、後になれば家産相続の形態が変化し、権利と物財とがズレてくることがあるのではないのでしょうか。たとえば先程のコメント(問題提起Ⅱ)にもあつたように、相続にあたつて営業権と祭祀権とが分離していくという事例はいくらでもあることです。家督とは、いくつかのエレメントの構成であつて、一体になっている時ばかりとは限らないのではないのでしょうか。そのようにいろんなエレメントに分けて考える必要があるのではないのでしょうか。

だいたい柳田国男もそうですが、民俗学の認識方法には、何か全体像的な抱括的な捉え方があるのではないのでしょうか。対象を複数のエレメントのコンビネーションとして捉える西洋風の学問方法ではなくて、原型とか原像という「型」の認識方法であつて、そうした「型」が

どのように析出されてきたのかということには曖昧に思えます。そうした方法では、その後の変化の様相は充分に捉えきれないのではないのでしょうか。

その点、有賀さんではなるほどいくらかは分析的ではありますが、やはり原型適及的な方法が見られます。その点について、今までの「家」理論、つまり柳田さんの方法に対して批判せざるを得ないのです。それでは、「家」の分解状況を正しく認識できないと思うからです。

それから先程、相続のことで親族関係ということを言いましたが、それが、父親という親族的地位にもとづく行為行為か、あるいは家父長という立場にもとづく行為であるのかを区別して認識しなければならないと思います。それらは、ある時期では一体であったものが分解するわけでして、家父長にもなった管理権と親族関係とは概念的に区別しないと、分解している対象や、「家」の問題はこまかく捉えきれないように思いますが。

「家」の中でも、親族的地位にもとづく父権というものが発動されており、だから親族関係として家族を捉え、「家」の中に家族があつて、そこに親族関係にもとづく親権が内包されているとする喜多野清一氏の立場のほうがすぐれているのじゃないかと思っています。

竹田―まあ私は社会学についてはまったく素人なんです。が、親族という概念は、日本の社会でも親族集団とか親族関係は厳然としているわけですが、ただ、父子の關係、つまり父親と子供の關係は親族關係の重要な一つの柱にちがいありませんけれども、それが血縁關係というなら、とうぜん、母方にも、両系に存在するわけですが、父系と母系ということは別問題として、多岐な親族關係の中で、父と子という直系的なこの關係だけが、何かこう屹立するといえますか、つまり、廃嫡ということが行われる（場合に）、つまり廃嫡ということはすでに、「家」をベースにしなければ（考えられないし）、廃嫡ということも、それはさっきの相続とか世襲とかいうこ



とも「家」に）かかっておるんとかうか、ということ  
が素人考えではしますが……。そこで、いろんな（もの  
と）混合はしているだろうけれども、ここではできるだけ  
概念を純粹にするといえますか、純粹化されたところ  
でものを考えるためには、他の來雜要素といえは語弊が  
あるかも知れませんが、そういうものはなるべく排除し  
て最もクリーンなかたちでまな板の上にのせると効果的  
ではないかというふうに考えたのがぶっちゃけた話なん  
です。父と子も親族関係にはちがいないけれども、その  
父と子というのが、親族という多岐な関係の中でその関  
係だけが屹立するといいましうか、それはどういうわ  
けでしょうか。

——日本の親族関係では確かに父系血統のほうが優先し  
ていることは事実だと思います。武家に典型的にあらわ  
れているし、庶民でも養取の場合に同様のことが見られ  
ると思います。

竹田先生の方法には、ウェーバーの理念型に近い「型」

の認識が強いように思います。しかし、実際は、家族の  
もつものと、ヘルシャフト (Herrschaft) のもつものと  
の、二つの違った要素がどのように結びつくかというよ  
うに考えるべきではないでしょうか。だから、ウェーバ  
ー的な理念型的分析から、親族体系と家父長制という異  
なった二つのレベルをどのように捉えるかという構造分  
析へと進まなければならないのではないのでしょうか。と  
いうのは、「型」を抽出する理念型的な把握では、型は  
いくつかの特徴の抽出によって構成されるわけですか  
ら、それ独自のものであるというのは当然でして、それ  
では、他民族との充分な比較の道は閉ざされているの  
ではないでしょうか。

——日本の社会構造の原理的なものとしての構造的分析  
である中根千枝氏の「タテ社会」論が述べられています  
たが、竹田先生の「家」の分析方法でも、原理的にはそれ  
と同じものが存在するとして、日本の社会構造あるいは  
「家」の構造としてあげられている点は全く同感です。

しかし、「家」と家族との分離はやはり少し疑問が残るのです。つまり、家族とはあくまで関係的概念であって、それが一つの集団としてどのように存在しているかというように考えるべきであって、そして、その集団がいかなるイデオロギーによって支えられているかというときには、その場合には、祖先崇拜がイデオロギーとして存在していると思います。しかし、それは、その集団を支える構造とは区別しなければならないと考えます。したがって、比較研究をするならば、イデオロギーと構造の両側面での把握が必要になるんじゃないかと思うのです。

それから、「家」は、人類学でいう「出自集団」(Descent Group)と似ているようにも感じられますが、それと同じような永続性は持っていないようにも思われますが。そうした方向で、中国や朝鮮との比較が必要になるうと思われます。

——中国や韓国、東南アジアの社会構造を比較の観点

から見れば、確かに祖先崇拜という一貫したものがあります。それは最近、米国では博士論文でとりあげられたりするほど注目をあびているテーマなんですが、そのような現象は確かにもっと構造的分析がなされねばならないと思います。

二つめは他民族との比較ですが、たとえば、韓国では、今日の日本より家督相続は強いし、逆に養取制度はそれほど重要ではないようですし、また系譜の点では階層などの経済的条件の差異によって規定されているようです。その点でも比較研究が必要なのですが、第三は、その際、比較のバウンダリ(boundary)が明らかにらないといけないのではないのでしょうか。例えば、志摩の国府に見られるような隠居慣行は、全く同様の形態が韓国の済州島にもありますし、また、日本のことでも、山村、漁村、農村によってそれぞれ異なるうとは思いますが。

その点から見れば、祖先崇拜は日本独特であるという

竹田先生の見解にはいくつかの批判点がでてくるのではないのでしょうか。

竹田―いやあのね。私が他の民族うんぬんと言いましたのは、祖先<sup>アンセスター</sup>というそれ自体ではなくて、それが仏教と結びついている、その結びつき方が日本の場合には非常に独自ではないかということです。ところが、東亜の仏教圏というのは、そりゃ東南アジアと中国や韓国はそれぞれ宗派<sup>セクト</sup>がちがう教義<sup>ドクトリン</sup>がちがうというのはそうですけれども、しかし、仏教という、大きな理論体系と言いますか、哲学・思想体系が東洋に広まった時に受けとめた、受けとめ方がみんな民族によって違うのというのは、何かベースの方にやはり何か違うところがあるのと同じかかと（思うのです）。日本の場合には、現在の韓国の仏教、それに中国、ベトナムの仏教とは非常に違うという、この歴然たる事実から言くと、間接的ですけども、受けとめた受けとめ方のベースの方に何か違うダイナミックといえますか、そういうものがあるところが

ないか、というところで日本の独自だと言いました。

それから、さきほどの他民族との比較のために、構造的な現象形態として（捉えなければならぬ）ということ、それはその通りなのですが、これも言いのがれにはならないのですけれども、いちばん初めに申し上げましたように、私はそういう同族とか系譜とか「家」とかから出発したのではなく、たまたま自分の置かれた環境<sup>エンバイロメント</sup>からですね、祖先というものは一体何かということから出発して、それについて（今までの研究のように）イデオロギーとか思想ばかりやっていますが、いつまでたっても：（だめで）、それを受けとめている社会がそういうものを産みだしているということへ、だんだんおりて行かないかということから、あとからくつつけたようになってたわけです。ですから、それを専門になさっておられる社会学の先生方からは、（それについて）ひじょうに疑問もあるし、穴だらけというようになるだろうと思います。確かにおっしゃる通りです……。

——やはり「家」概念を祖先崇拜だけに集約してみる立場には、もう一つのみ込めないものが残るようです。もう少し、多様な何かをふくんで考えた方が良いでしょう。

竹田——まあこれはさっきの話にもありましたように、日本の民俗学というものの方法論上の長所であるけれども、同時に弱点でもあるということなんです。(つまり)エクステンシグな調査事例から広く材料を集めてきて、その上でさっき批判として言われたような「祖型」とか「原型」というウルタイプ (Ur-Type) と言うものをどう導き出しているのが(民俗学の)到達点だという考え方ですが、これについては最近ですが、学会の内部からも批判があります。それは要するに足が地についていないので(あって)、歴史的な人間の社会生活というものはもっといろいろな要素をもっている一つの場面として現われている。それを全部捨象してしまつて、あちこちから木の葉だけ集めてきてそれを論するような論議はあ

かんのや、という議論があるわけです、しかし、それも確かにその通りなんですけれども…、(そうした方法は)インテンシグな調査といえますかフィールド・サーベイというか、それが軽視<sup>ネグレクト</sup>されている。ですから、広くそのかわり浅くなるか、深く狭くなるか(どちらかです)、結局、広くて深いのが理想的ですが、これは事実としてできないことです。(それで)従来の長い間の民俗学の方法は主として言葉(民俗語彙)をあちこちからちよいちよいと集めてくるようなエクステンシブな(調査の)ほうによってきただろう、ということなんです。

しかし、有賀先生はじめ喜多野先生も非常にインテンシグな調査の上になつて、そして(その上に)広く他にも材料を得ておられる、だから立論の基礎というかいちもとなつている考え方の打ちだされた中心柱というのは、やはりそう広くはないのじゃないかと思ひます、事実そんなこと(広く深く材料を集めること)はできることでもありません。ということとして、自分(の場合)

は、体力がそうやたらとあちこち行ける状況でもありませんでしたから、なるべく、自分の近いところで一つインテンシブにやろうということですから、非常に視野が狭くなっているだろうとは思います。(だから)それ(インテンシブな調査の材料)を中心に置いて、他のものはそのメタモルフオーゼとして考えようと思っていたのです……。

—— 祖先にたいする信仰の生じる心情が自分にはどうも理解できませんし、とくに若い世代はそれをどう考えているか、ということが問題になろうかと思いますが。

竹田―祖先崇拝の「心情」といいますかムードというか、それがどこから生じるかということですが、私はあたまから、それは「心情」というものとは違うと思えますけどね。なぜかと言いますと、もしそういうような個人的な心情なら、わしはこんなんやめや、と言うことだっっていくらでもできる。まあ都会に住んでいたら、それ(先祖祭祀しないこと)は勝手や、ということになります

けど、村落に住んだらこれは許されませんですね。つまりわしは先祖さん好きやねんさかい崇拝するけど、おまえらいややったらやめとけ、という考え方というのは村落共同体の中ではじっさい許されない。したがって、心情というものの、心情にはちがいないけれどそれ以上のものがあるということですね。くわしい事は時間があれ(ない)ですから……。

それから、今の若い連中を見ていたらそんなもん一向にやってるそぶりもないやないか、ということは確かにおっしゃる通りなんですけど、けれどもね、しかし若い世代がこれから年をとって中年になり高年になって来たときに、もちろん先のことですからはつきりとはわかりませんけれども、そうなってきた時、一直線に今もっている気持ちが拡大再生産されて、そのまま行ってしまうかどうか、ということですね、私はどうもそうはならんのと違うかという感じがしますですけどね。これも具体的な例になる話ならいくらありますが、時間があれ(ない)

ですのでこれぐらいにします。

——用語法の点ですが、竹田先生の本来の用語法でいうならば、「家」はイエでなく、イへとするのが正しいのではないのでしょうか。それから、「家」と家族とは別個の存在であるという考えが生まれてきたのは、丹波・山国での事例にふれた時にできたのでしょうか。

竹田——いやあれば、結果的にみてであって、（私は）もっと前から、そんな事を考えていたわけですよ。しかし、山国であんなもの（絶家再興の例）見て、これはまさにおれの考えていた通りやな、と思いました。前後逆みたいなものです。けれども、あれが私にしたらひじょうに良い材料、実例を与えてもらったという感じでしたな、卒直に言いますと。それ以前に（考えていたのは）、絶家再興というようなことがどうしてある（起る）のかということでした……。とにかく、新しい「家」が創設されるのではなくて、絶家が再興されるというのは、再興される以上はそこに「家」がなければ意味がないわけ

で、それはどういうことか（意味か）と、そう考えるべきではないかと思っていた時に、あれ（山国の事例）にぶつかりました。

それから、イエの（用語の）ことですが、それは確かにイへと書けば翻訳される時 *Iie* と書かれますね、それは今の発音とは違いますからね、外国人にとっては何のことかと、ひじょうに混乱をおこすということで、そうしたのです。ただね、それは橋浦（泰雄）氏なんか、あれはイへでへはヒやと言ふうに言っているらしいですが、評論社のあれ（『日本人の「家」と宗教』一九七八年評論社刊）に書いた時には（そうしたのですが）、ちょっと違うらしいですな。つまり、へという音がね、日本語の古い発音では二つあるらしいです、で、上代仮名づかいでは火ではなく、火というのは炉という戸籍の戸とは家のあれとは違うということらしい。しかし、国語学者の間でもいろんな異論がある所らしいですけど、しかしだいたい有力な説は、奈良時代に八十七ですかね音があ

ったという、今は五十音ですけれども、ウムラウトのついている母音があったと（いうらしい）、つまりイヘとは簡単に炉をめぐる集団というのは短絡した考え方という意見もあるようですな。だから、（それについては）もういっぺん点検せんといかんようですな。

—— 絶家再興が「株」というようないわば経済的なものに裏付けられた場合は別としまして、もしそういう経済的なものにもとつかないような、「家」の潜在ということとは考えられるものでしょうか。

竹田—— それは村落ではなくて都会へ行きますとねアズカリボトケ（預り仏）という習俗（があります）。（それは）私の所によくあるのですが他にもあると思います。が、よくでてくるのは妻の実家の家族が死に絶えたという場合、相続人があったけれども（つまり）兄貴があとを相続して妹がとついできたと、そして親が先に死んで（相続者の兄も死んで）実家も家族も誰もなくなってしまうという場合、これは家族はまったくなくなってしまうですね、そういう時には、嫁さんが嫁ぎ先で自分の実家

の位牌を祀っているという例が、京都なんかではけっしてめづらしくありません。それは、農村とちがつて生産手段や生活の形態が違いますから、とくに商売（人）やそういうことについてどうなっていくのか知りませんが、ともかくそういうかたち形になって（います）。（これは）それからさらに発展したのか別の形態になるのか知りませんが、寺の祠堂という、つまり（先祖の位牌を）寺に預けるという形ですね、これもかたちはひじょうに違うけれども、一連の考え方の上に立っているのところがうかと考えます。つまり家族が消えたその瞬間に「家」というものが霧散消滅してしまうなら、こんなことにならないのではないですか。これは都会の場合ですけれど……。

司会—— どうも長時間ご討論ありがとうございました。時間もきましたので、一応これでおわらせていただこうと思います。今日の議論の大きな柱ぐらいは、（後日）整理してお送り致したいと存じます。